

思い出の交流会

11月12日(火) 毎年恒例の交流事業であるバスツアーを実施した。当日はまさに、天高く絶好の行楽日和となった。

総勢52名で朝9時過ぎにJR尼崎駅から出発。バスの中では、楽しいクイズで、あっという間に京都に到着した。

左京区にある京都教育文化センターでは、伏見区の小栗栖日本語教室と近畿中国帰国者支援・交流センターの皆さんがすでに会場の準備を終え、コスモスの会一行を迎えてくださった。

交流会冒頭の挨拶で宗景代表は、中国残留孤児国賠訴訟の頃から交友があった石堂皓二朗さんとの再会と、小栗栖日本語教室との交流が実現できたことの喜びを伝えた。次に、両教室学習者の1世の自己紹介が始まった。中国語や苦手な日本語で各々が自分自身についてあふれる思いを語った。それから昼食と各教室の活動紹介を行い、最後に歌、広場踊り、ヤンガで心をひとつに交流会は盛り上がった。



日本語ボランティア研修 今回は、日本語ボランティアに興味のある方やボランティアに関わりたいたいと思っている方も対象に、5月、6月、7月の3回に分けて実施しました。講師は、大阪YWCA日本語教師会講師の野村麻里先生です。1回目は、中国残留日本人など日本語に不慣れな学習者にかを考える内容。そして2回目、3回目は、外国語として日本語を見てみる観点で、動詞・形容詞の知っておくと便利な知識をお話いただきました。

あがって美しく、不思議と神聖な気分になった。それから平安神宮の脇にあるお土産処「トント」で思い思いに買い物を楽しんでから一行は帰路に就いた。予定通り5時にはJR尼崎駅に到着し、皆交流会の思い出を胸に明るいうちに足早に帰宅した。最後になりましたが早く交流の申し入れに応じて下さった小栗栖日本語教室の皆さん、的確な通訳で交流会を盛り上げてくださった支援相談員の韓静さんに感謝申し上げます。(田中いすみ)

今回の研修会は公募したこともあり、今までこの研修に参加されたことのない、岡本教室や明石教室のスタッフ(4名)、ボランティア経験のない方など(5名)が研修案内チラシを見て、参加されました。特に、新しい方は熱心に耳を傾けておられました。日本語ボランティアへの動機づけになったのではないかと今後のご活躍を願っています。(田村博志)

尼崎市から表彰

コスモスの会が尼崎市から「永年にわたり社会福祉活動を積極的推進し住民の福祉向上に貢献した」と評価され、10月16日の表彰式で尼崎市長から表彰状をいただきました。



きました。尼崎地域で中国残留日本人の支援している団体としてたいへん嬉しいニュースです。(宗景正) 新年交流会のお知らせ 日時：1月18日(土) 12時30分～16時 会場：尼崎市立中央北生涯学習プラザ1階大ホール 連絡先：080-8318-0858 (田村)

あんな話こんな話

昨年、ラグビーワールドカップは日本中を熱狂させました。そう言えば、外来語である「ラグビー」と言う言葉は、中国語にはなく、ボールの形がオリーブの実に似たことから、代わりに「橄欖球」と広く呼ばれています。 去年的橄欖球世界杯让日本举国疯狂。 说来汉语里并没有“Rugby”一词。因比赛用球的形状和洋橄欖的果实比较相像，所以这项运动被普遍称为“橄欖球运动”。



(文：空海 画：ババリーナ)

2020年 明けましておめでとございます



佳木斯の港 1932年10月、満州国建国から半年後、在郷軍人で組織され武装した第一次試験移民団がこの港に着いた。ところが、抗日遊撃隊の襲撃で上陸できず、この港で一泊を過ごしたという。この移民団を皮切りにその後敗戦までの14年間に約30万人の日本人農業移民が満州に渡った。時は流れ、広く青い空に高層建築が林立する今の風景から当時を想像することは難しい。だが、この地で日本人が関わりはじめた当時のこと、その後の歴史を決して忘れてはならない。日本と中国の未来のために。(写真・文：宗景正)

中国残留孤児と なった弟よ!

次に、当会スタッフの田中いすみのインタビュー、で田中義祐さん(87歳)が体験を語った。問いかけに噛みしめるように応える姿が印象的だった。 義祐さんは「かけはし」17号で紹介した中国残留孤児、田中修さんのお兄さんである。1943年、11歳で家族7人で昇平開拓団に加わり満州に渡った。45年8月敗戦、避難命令が出て苦難の末12月にハルビン到着。収容所生活の中で下の第二人は中国人に預けられた。46年10月一人ぼっちで日本に帰った。72年日中交回復後、弟の修さんの情報が残留婦人を通じて大阪自興会(*)に入ってきた。義祐さんは、調査と確認に奔走し再会を果たした。修さん一家の帰国にあたり、兄として多くの援助をしてきた。 弟さんに望むことはとうとう問いに、「元氣ならそれでいい」と一言述べて涙で声を詰まらせた。

「ソ満国境15歳の夏」 映画上映 第一部では映画上映で、1945年夏、敗戦によってソ連と満州の国境付近に置き去りにされた15歳の中学生たちの苦難を、東日本大震災から1年後の福島で原発事故に翻弄される同じ15歳の中学生たちの思いを交差させた感動の映画を上映した。



問いかけに答える田中義祐さん(中央)

74名の方が協力くださったアンケートでは、「生々しい体験を聞き当時の状態を想像した」「映画を観て講演の中身がより深く理解できた」「中国残留日本人についてほとんど何も知らなかった。知ることができてよかった。自分を大切に生きていくこと思った」など、多くの感想や意見をいただき、今後のコスモスの会の活動に大きな励みとなった。 当日、会場には田中義祐さんと同じ昇平開拓団で、しかも高明礼屯という同じ集落からいっしょに学校に通っていたはずという大阪在住の中国残留孤児、貴名としおさんが来られた。74年ぶりの再会であったが、お互いに記憶を呼び戻すことはできなかった。 最後に、田中義祐さんをはじめ企画を支援していただいた関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げます。 なお、講演の詳細やアンケートのまとめはコスモスの会HPに掲載します。(石打謹也)

理解を深める 集いを開催!

11月30日(土) 尼崎市立中央北生涯学習プラザ1階大ホールで、第5回「中国残留日本人への理解を深める集い」を開催した。会場は190名を超える参加者であふれた。

満州開拓団の歴史 第一部の初めに、今回の講演者である田中義祐(よしすけ)さんの加わった大阪の昇平開拓団を含め、商工業者が転業開拓団として満州に送り出されていった経緯など、「満蒙開拓団の歴史」を宗景代表が講演した。

大阪自興会(*)に入ってきた。義祐さんは、調査と確認に奔走し再会を果たした。修さん一家の帰国にあたり、兄として多くの援助をしてきた。 弟さんに望むことはとうとう問いに、「元氣ならそれでいい」と一言述べて涙で声を詰まらせた。

写真展 1階ホール前ロビーでは、集いの4日前から満州開拓団が送りだされた経緯と田中さん一家が入植していた黒龍江省安達県昇平鎮の現在の写真(宗景正・撮影)を展示し、多くの市民に見ていただくことができました。

最後に、田中義祐さんをはじめ企画を支援していただいた関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げます。 なお、講演の詳細やアンケートのまとめはコスモスの会HPに掲載します。(石打謹也) *大阪自興会：大阪府の引揚者支援団体

かけはし

中国残留日本人支援団体 尼崎日本語教室 コスモスの会だより 第18号 2020.1.1

編集発行：コスモスの会広報部 〒661-0953 尼崎市東園田町4丁目152-16 TEL：06-6493-5563 FAX：06-6493-0817 コスモスの会ホームページ・URL=http://kosumosunokai.sakura.ne.jp/index.html